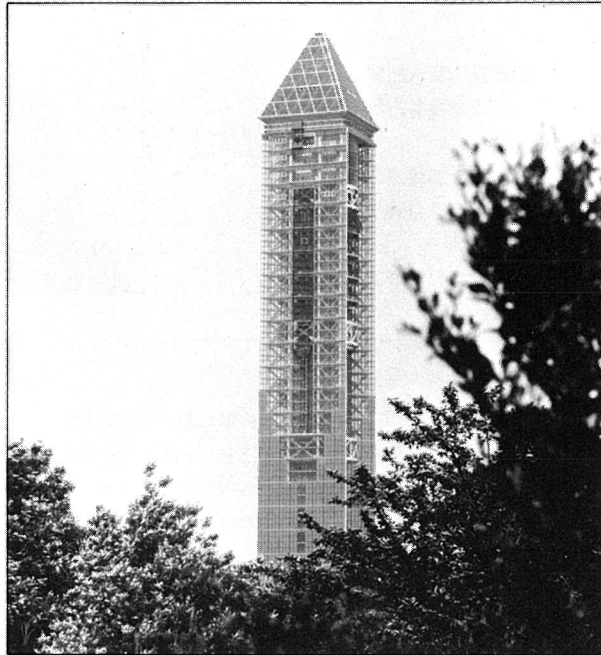


日本産業衛生学会東海地方会

## 地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会  
〒470 - 11  
愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98  
藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生  
学教室内 電話 (0562) 93 - 2453  
発行責任者 島 正吾

(題字 皿井 進筆)



7月上旬完成予定の東山公園の展望塔 (名古屋市公害対策局 岡崎克廣氏撮影)

名古屋市は、環境教育の一環として東山公園の展望塔に大気汚染表示装置 (スカイウォッチング) を設置する。この装置は  $SO_2$ 、 $NO_2$ 、SPM、温度、風向、風速のデータがリアルタイムに表示できる。

## 衛生学四十年

名古屋市立大学医学部衛生学教室教授 青山光子



母校の衛生学教室に勤務して今年で満40年。インターンを終ってすぐ研究室へ入り、与えられたテーマは衣服衛生に関するものだった。数年間、さまざまな環境条件下で、種々な衣服着用時のガス代謝や皮膚温を測定する毎日が続いた。訪れる人もほとんどなく、“まるで仙人みたいね”と友達に感心(?)されたりした。

昭和30年代に入って生活が一変した。地域によってワイシャツの汚れがちがうということから、名古屋市内各地の家屋軒下に木綿白布を下げ、その汚染程度を分析した。これが大気汚染の研究にとり組みきっかけになった。テレビ塔の展望台の屋根に登って高度別汚染状況を調べたり、排気ガスの生体影響調査をした。交通量1日10万台の桜通り日銀交差点などに百葉箱を置き、ラットを6ヶ月間飼育して、毎日、エサや水を与えるため巡回したことは忘れられない思い出である。

一番印象に残っているのは衣料加工剤の問題である。昭和42年、科学技術庁に衣料加工処理剤の諸影響に関する調査会が作られた。医学関係者は私1人。独自に衣料による皮膚障害を中心に調査を行い、かゆみ、紅斑、発疹などの経験者の多いのに驚いた。被害衣料

からの化学物質の抽出、動物実験、パッチテストなどの研究が続いた。その後、この問題は通産省、厚生省と引きつがれ、問題提起後8年目の昭和49年「有害物質を含有する家庭用品の規制に関する法律」が施行され、現在ではホルムアルデヒド、デイルドリンなど9種類の化学物質が衣料への使用を規制されている。

科学技術の目ざましい進歩は衣生活の合理化、衣服材料の性能向上に大いに貢献したが、その安全性が十分確認されないうまに多くの化学物質が使用された結果、このような健康障害を招くことになったことがわかり、身近な家庭用品等への化学物質の乱用が、いかにわれわれに影響を及ぼすかを痛感した。

このように、これまでは種々な化学物質が直接、生体にどのような影響を及ぼすかを中心にその安全性が検討されることが多かった。

ところが最近、フロンガスのオゾン層破壊、二酸化炭素等による地球の温暖化、酸性雨など地球化する大気汚染がとり上げられ、地球規模の長期的な影響が憂慮されるようになった。

衛生学を研究する中で、遠い将来を見つめ、広い視野で多角的に化学物質の安全性を考慮して行くことの必要性をつくづく感じるこの頃である。

# 特集1

## 第5回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理 担当者のための研修会

### はじめに

第5回上記研修会は、去る3月10日、前回と同じく名古屋三の丸会館芙蓉の間において盛大に開催された。

今回のプログラムは次の通りであった。

**特別講演** 座長 岩井 淳 (三菱名古屋病院)

「がんをめぐる最近の動向

—特に一次予防、二次予防について—

愛知県がんセンター研究所 副所長・疫学部長 富永祐民

**講演** 座長 森川利彦 (三菱電機名古屋)

「健康の保持増進対策と具体的な運動処方」

藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生学教室 加藤幸久

**講演** 座長 伊藤英夫 (トヨタ自動車)

「職場における面接技法のあり方について」

三重県立看護短期大学 教授 杉浦静子

総合司会進行をトヨタ関連部品健保の保健婦清水高子さんをお願いして、会の雰囲気がソフトに和やかに進められてたいへん好評であった。過去4回の研修会が110~140名の参加であったのに対し、今回は163名という予想を上回る多数の参加者で、企画を担当したものとして全く嬉しい誤算であった。

会場の都合で、何人かの人達にはせっかく申し込まれたのに、お断りせざるを得ないような状態で、今後ともこんなに多数の参加があるようであれば、もっと広い会場を考えなければなるまいと関係者で話し合ったことであった。

ちなみに、今回の参加者の内訳をみると、県別では、愛知92名、静岡35名、三重14名、岐阜18名、福井4名となり、職種別では、医師37名、保健婦33名、看護婦50名、衛生管理担当者等46名であった。また、参加者のうちで、会員は56名、非会員は107名で、ひろく現場の衛生管理に係る会員外の人達の、本研修会に対する認識が根を下ろしつつあることを知ることができた。

本特集は、当日、ご講演いただいた要旨を、参加できなかった会員の方々のためにも抄録の形で演者にご執筆をお願いしたものである。

熟読されて今後の健康管理へのご活用を期待する。と同時に、今後、本研修会の企画運営等について、お気付きの点があれば、どしどし事務局までお聞かせくださるよう、お願いしたい。

岩井 淳(三菱名古屋病院)

### 特別講演 がんをめぐる最近の動向

—特に一次予防、二次予防について—



富永 祐民

(愛知県がんセンター研究所 副所長・疫学部長)

#### ●日本におけるがん死亡の動向

日本におけるがん粗死亡率の推移をみると、1947年頃まで横ばいであったが、その後上昇を続け、1981年には脳卒中と入れ替わって死因の1位となった。年齢別にみると、がん死亡割合は中年期から初老期にかけて最も大きい。粗死亡率は年々上昇しているが、年齢訂正死亡率でみると男では1960年頃から横ばい、女では1965年頃から明らかに低下している。

#### ●部位別にみた日本人のがん死亡・り患の動向

胃がんは現在なお最も多いがんであるが、男女とも1960年頃から明らかな低下傾向を示している。女では子宮がん死亡率が1950年頃から低下傾向を示しており、肝がん、食道がんも低下傾向である。しかし、男では肝がんは増加傾向、食道がんは横ばいであり、タバコ、アルコールが要因として疑われている。上昇傾向の著しいがんは、肺がん、大腸がん、膵がん、胆道がん、前立腺がん、卵巣がんなどである。特に、肺がんは男女とも近々数年のうちに、胃がんを抜いて第1位になると予想されている。

#### ●がんの危険因子

今までに明らかにされたがんの危険因子として、食物、タバコ、アルコール、放射線、日光、大気汚染、薬剤、農薬、職業性発がん物質などの環境性因子および遺伝的素因、免疫能、ホルモン、老化などの宿主因子があげられている。

#### ●がんの一次予防と二次予防

がんに歯止めをかけ、減少させるためには、がん検診による二次予防にあわせて、がんの危険因子の除去、抑制因子の補充によるがんの一次予防を推進する必要がある。一次予防と二次予防のそれぞれの長所を生かし、短所を補うよう両者を組み合わせた予防対策が必要であるが、今までのがん対策はがん検診を中心とした二次予防に偏っていたきらいがあり、今後はさらに一次予防を推進する必要がある。

喫煙対策の推進、食生活の改善、アルコールの過剰摂取を避けるなどのライフスタイルの改善、大気汚染などの生活、労働環境の改善、B型肝炎ウイルス防止対策の普及などにより、約30%のがんを予防することが可能であるとみられる。また、これらの諸対策は、循環器疾患、呼吸器疾患の予防、ひいては健康の保持増進にも役立つことと思われる。



## 講演 健康の保持増進対策と具体的な運動処方

加藤 幸久

(藤田学園保健衛生大・医・公衆衛生)



近年、生活の合理化、経済の発達により、日常生活での身体活動が減少し、必然的に運動不足になってきた。この状態は、体力や生理的予備力を低下させ、最終的には成人病という一群の疾患を増加する大きな因子となっている。体力づくりの目的は、1次予防として

の成人病対策であり、企業においては、中高年者の労働力の劣化防止、災害率の低下、医療費の削減などとなる。従来より、企業における体力測定は、主に文部省によるスポーツテストが実施されている。しかし、このテストの目的は、青少年あるいは広く国民の体力向上をめざし、スポーツの普及発展を意図して作成されており、遺伝素因や神経機能に左右されやすい巧緻性、平衡性等に関する種目も含まれている。従って、体力年齢が良いのに成人病を保有したり、個人の運動処方作成が困難であるという欠点をもつ。成人病対策としては、呼吸・循環器系の能力を把握する全身持久性に主眼が置かれるべきである。これは、長時間運動を継続させる能力を指し、俗に「スタミナがある」とも称され、有酸素能力、エアロビクス能力とも称される。この能力が備わると、運動中に、より多くの酸素を取り込むことができ、呼吸、循環という酸素運搬系が強化され、全身機能が活発化される。更には、肺・心臓が丈夫になり、骨や筋肉を強くし、健康的にシェイプアップでき、成人病対策として大変有効な方法である。実際の測定では、最大酸素摂取量の測定が最も良い指標となる。これには、トレッドミル、自転車エルゴによる漸



自転車エルゴの実演

増負荷法を用いガス分析を行うが、実施にはかなりの費用、時間がかかる。このため、自転車エルゴを用い、運動中の脈拍から推定する方法が一般的に行われる。いずれの方法でも、事前に医学検査が必要であり、医師の管理下で、負荷中の心電図や血圧測定を行うとともに、救急体制を整える必要がある。通常、酸素摂取能力が推定されると、安全性と有効性の限界が算出され、その人に合った運動種目、強度、量、頻度で運動処方が作成される。各個人は、この処方に従い、ライフスタイルにあわせ微調整し実施する。また、疾病のある場合、この処方を修飾する必要がある。例えば、高血圧は、

## 講演 職場における面接技法のあり方について

杉浦 静子 (三重県立看護短大教授)



1. 産業の場における面接の中での保健面接の位置づけ

産業の場で行われている面接には、採用試験面接、人事考査面接、作業推進上の面接などがあるが、それらと保健面接とは質的にことなっている。すなわち、これらの面接は面接

者側に目的や意図があり、それに被面接者があうかどうかの評価がなされ、面接者主導型で進められる。それに対して保健面接は、被面接者の側の抱く困りや迷いを中心課題とし、それへの援助を目的とするので、来談者主導型で面接が進められる。

2. 保健指導と健康相談

人は病気になった時、病気の治療と病気をかかえての生活変更を余儀なくされる。医師から出される診断、治療、療養方法などは保健指導としてクライアントに指示される。すなわち保健指導は科学的理論のもとずいて、クライアントの取るべき方向を指し示す事である。健康相談は、クライアントが生活変更を迫られ、それへの適応が円滑に出来ない場合に起こってくるクライアントの悩み、迷い、苦しみなどの感情を中心に、クライアントが自ら対処するように、感情の論理に従って進められる。

3. 健康管理における相談の機能

相談の機能として次の五つのものがある。

補完機能：面接者が「きく」姿勢をとることにより、通常健康診断や健康調査では把握されることができない愁訴や不健康感を知ることができる。

通訳機能：医師の診断、治療、療養方法などの指示を、その人の理解度や関心度に合わせて説明することができる。

包括化機能：病変部位だけでなく、その人の生活条件、職場環境条件を含めてその人への援助を行うことができる。

個別化機能：一般的、原則的な医師の指示をその人の暮らし方、働き方や生活感情に合うようにアレンジする。

受容機能：ありのままのクライアントを受け入れる。しかし、健医療従事者は、建前論者・評価者の立場から中々抜け出せない。従って、知的に受容が理解できても、対応態度は変わらないことが多い。そのため面接技術の体験学習が重要である。

4. 援助のための面接技法

面接者は、他人の心を自分の考える方向へ操作しようとし、基本姿勢がある。操作しようとしている自己の姿をまず知ることが求められる。

面接の基本的技法として、出会いの技術、沈黙の技術、クライアントの感情を反映する技術、話を続けさせる技術、まとめの技術などの習得が必要である。

午前のトレーニングを控えたり、肥満には、体脂肪を燃焼するため夕食前のトレーニングを行い、腰痛には、腹筋トレーニングを加えるなどのアレンジを必要とする。更に、企業内においては、従業員の実態を把握し、運動のスペースの確保、スタッフ作りを押し進め、産業医の指導の下に成人病検診、栄養相談、運動処方を一体化したチーム作りが必要となる。企業によっては、立派な施設を作っても、日常的に利用されていない場合も多くある。運動を継続させるには、職場や自宅で実施できる工夫が必要であり、このため企業担当者は、目標を設定し、持続的な教育啓蒙活動を行い、対象者には、楽しく実施させる必要がある。

# 特集2 産業医学研究の今日的課題と展望①

産業構造の変化、産業技術の進歩にともない産業医学研究の分野では従来からの課題に加えて、多くの新しい課題が生まれてきている。そうした産業現場からの要請に応じて、東海地方の7つの医学部、医科大学では、様々な角度から多岐にわたる産業医学の課題に対する取組みが進められている。本ニュースでは、今号から連載特集のかたちで、テーマ別に各大学の研究室にお願いし、研究の今日的課題と展望を中心に、各研究室の研究紹介も含めて述べて頂くこととした。この特集が現場で活躍する読者と研究室とを結ぶホットラインとなることを期待したい。(編集部)

## レアメタルによる生体免疫毒性

吉田 勉 (藤田学園・医・公衆衛生)



近年の高度な技術革新により、ベースメタルとよばれる鉄、銅、鉛、アルミニウムなど機械、建築材料、船舶、自動車等の構造材料として使用されていた金属とは異なり、レアメタルとして知られる数十種類の金属が注目され始めた。

レアメタルとは、希少金属・希金属と訳されており、rear earth 即ち、地球上では稀な金属と解釈されていた。“Rare Metal Handbook”によれば、37種類の金属が属するとされている。これら金属は、ニューセラミック、半導体材料、電子部品、磁性材料、超伝導材料における機能材料の中心的役割を果たしており、日本の産業を大きく左右する戦略的的金属として、産業界を中心としてその開発、採掘、備蓄や応用等に大きな関心がよせられている。

従来より、金属は生体にとって有益な作用や、あるいは生体機能に必要なものが必須金属と言われ、それ以外は汚染金属と呼称されてきた。しかし、レアメタルに関して、ことに生体免疫系に与える影響についてはほとんど知られていない。

近年金属毒性の研究に、免疫学的手法が大きく取り入れられ、金属暴露による免疫担当細胞の機能的検査としてマクロファージの貪食能、遊走能、殺菌能に与える影響やその活性化、インターロイキン1産生に関する影響、またリンパ球に関しても、そのサブポピュレーションの検討、インターロイキン2活性、キラー細胞活性、リンパ球混合培養試験、抗体産生細胞への影響、リンパ球幼若化反応などの検討。また、形態学的には、各種の特殊染色法により、光顕的ならびに電顕的な検討が実施されてきている。

私どもの教室では、島先生の慢性ベリリウム症に関する臨床医学的研究ならびに労働衛生学的検討、さらにこれらの成果をふまえた免疫アレルギー学的研究。ベリリウムと同様に皮膚に肉芽腫を形成するジルコニウムに関する研究。また、塩化白金酸暴露による気管支喘息症例に関する研究。最近ではニッケルやコバルトに関しても検討を始めている。

これまでの免疫毒性の基礎的研究から、ベリリウム、ジルコニウム、白金、ニッケル、コバルトは低濃度で弱い Mitogen 作用を持ち、また一部の金属には、immunomodulator としての作用があることを明らかにしてきた。

今後、これら金属やその化合物は、さらに広範に使用されることが予想され、レアメタルに関する生体影響の検討は重要度をますます考える。

金属  $\left\{ \begin{array}{l} \text{base metal} - \text{鉄, Al, Cu, Zn, Pb} \\ \text{rear metal} - \text{Li, Be, Ti, V, Cr, Mn, Co, Ni, Ga, Ge, Se, Sr, Zr, Nb, Mo, Pd, Cd, Sb, W, Pt etc.} \end{array} \right.$

## わが教室とメンタルヘルス

滝川 寛 (三重大・医・衛生)



### ● ときの流れとメンタルヘルス

昨年、労働安全衛生法の一部が改正され、従来進められていた中高年者を対象にしたシルバーヘルスプランが更に発展し、全労働者のトータル・ヘルス・プロモーション・プランとして新たな活動が展開されることになった。

産業構造の変革と共に対象労働者の精神健康に対する考えも変わり、その名もメンタルヘルスケアと改称され、かつての精神障害者対策のイメージを改めて精神障害者のみならず巾広く根本的立場から労働者の精神健康を求める活動が展開されている。

「研究にはトータルな人間の観察こそが大切、と口癖のように云われた坂本弘教授の慧眼はすでに30年前に今日の状態を予測していたのであろうか？」

### ● わが教室での取り組み

教室では産業疲労研究の延長線上の問題として産業精神保健の研究が進められてきた。従来からの環境衛生学の分野を拡大して精神疲労をパフォーマンスの側面と精神衛生的立場から取り上げ人間-機械系および人間-人間系の検討が始められた。1960年代のことである。C.M.I.の簡易化と各種集団への応用、紡績工場寄宿舎の精神衛生的環境の調査、頻回羅患者の精神身体医学的観察など、次々と日本公衆衛生学雑誌、産業医学雑誌に報告された。更に新入社員に精神適応、欠勤情報の産業精神衛生的評価、ストレスと疲労など集団としての観察と共に個々の労働者との接触の中から新たな保健技法の必要性にせまられることになった。その結果、学際領域の知識が吸収され「プライマリー・ヘルス・ケアにおける保健指導・健康相談と面接技術、日本総研出版(1980)や「生活ストレスを考える、垣内出版、全5巻(1985)として上梓された。一方、メンタルヘルス活動の職場定着を図るため支援組織としてメンタルヘルス活動のライン化を提唱し、その円滑化のために職制のリスナー機能を重視した。従って職制に対するリスナー教育にも力を入れた。すでに県内企業のうち定着の萌芽がみえるところもある。

### ● 課題と展望

坂本教授の独舞として始められた精神保健研究は実を結びつつある。しかし、教室員に対してメンタルヘルス研究への参加は一切強制されていない。今後若手研究者がこの問題にどのように対応するかが教室にとって一つの課題である。また、メンタルヘルス活動の評価に関する検討も未だ残されたまゝになっている。

メンタルヘルス活動は今後更に進展するであろう。そのとき産業医には産業医学研修のみでなく、人間学の素養が求められることになろう。



## 特別寄稿

### 岐阜滞在10年を振り返って

吉川 博

(中災防・日本バイオアッセイ研究センター所長)

私が産業医学総合研究所から岐阜大学医学部公衆衛生学教室に赴任してきたのが昭和53年12月であります。そしてこの3月で定年退官することになりました。この10年間、産業衛生学会東海地方会に入れていただき、また理事にもさせていただきます。先生方に大変お世話になり、まことに有難うございました。厚く御礼申し上げます。

今になってこの10年間を振り返ってみますと、まことに短い期間であったようにも思います。やりたいこと、仕残したことが沢山あり、去りがたい気持ちもあります。

研究所におりました当時は、産業保健はいつも総論的立場で考えておりました。岐阜にきて、各工場からの相談を受けて考えなければならぬことは、各論的なことでした。総論は理論構築でできますが、各論は必ずしもその通りにはゆかぬもので、当時は相当に苦労しました。しかし、総論をしっかり把握しておらないと、各論が立派に仕上がらないこともわかりました。大変よい勉強をさせて

もらいました。これは全く研究者としても同じことが云えます。私の経験から云いますと、興味あるテーマを実験に移し、面白い結果を得、それを更に突込んでいくと、どんどん研究は細い狭い道に入り込んで行きます。時には、私はなんの目的でこんな実験をしているのだろうと振り返ることになります。これは要素還元という科学の方法論の一方で、いま包括科学が云々されていることと似た点があると思います。研究者は自分なりの、研究分野における総論を構築しておくべきです。

もう一つ考えさせられたのは、小・零細企業の産業保健をどうしたらよいかということでした。岐阜に来た当時、有機溶剤作業主任者の制度ができた頃で、そのための講習会によく出かけましたが、受講者の方から、今の話をうちの親方（企業主）にしてほしいということをよく聞きました。衛生管理を担当する者がいくら知識をもって、企業主に理解がなければ、小・零細企業の産業保健はなかなか前進しないことを知りました。それ以来こうした講習会にはつとめて出ることになりましたが、なかなか企業主が出てこられず、代理の方が来られるのです。企業主に産業保健を理解してもらうにはどうしたらよいか。私は嘱託産業医に頼るのがよいと考えます。対等の立場で十分に話し合えるからです。ただ問題は、産業医の先生方にそれだけの力のない方がいまだ多いということです。私も可能なら多くの小・零細企業の産業医を試みたいと思うこの頃です。

最後に再び、産衛東海地方会の先生方にお世話になりましたことに深く感謝いたします。(元岐阜大・医・公衆衛生)

### 瀬戸旭医師会が実施した産業医研修を中心とする産業保健モデル事業

吉野 貞尚 (元旭労災病院副院長)

日医は21世紀に向かい産業保健の重要性に鑑み、地域、産業特性に即した産業保健活動を展開していく上で参考にするため、地域、規模、産業構造などが異なる三地区医師会を選定し、昭和61年を初年度とする3ヶ年の研修事業を実施した。

私達の瀬戸旭医師会も指定を受けて北九州医師会、宮城県大崎地区医師会連合会とともに、この産業医研修を中心とする産業保健活動モデル事業をおこなってきたが、本年三月をもってこの事業を終了した。

大都市型の研修をおこなった北九州医師会は全面的に産業医大に研修を依頼し、大崎地区は熱心な医師会員の企画により、主に東北大の指導をうけて研修が行われた。当、瀬戸旭医師会は愛知県医師会産業医部会と協力し、瀬戸旭地区を主体とした研修と、愛知県全体を対象にした二つの研修を行った。県単位で行う研修は保健衛生大公衆衛生学教授島正吾氏に指導を依頼して行われた。研修内容は詳細なテキストにして配布もされていて、後日の勉強にも役立っている。

瀬戸地区における研修は医師会長、名大衛生学竹内教授の指導下に産業保健担当理事が企画して研修会、工場見学などが行われた。さらに、毎月一回、産業衛生一口メモを配布して研修会に参加できなかった会員にも産業衛生を理解してもらうように努めた。

以下は県および地区に於て行われた研修であるが、愛知県医師会産業医部会も愛知医報に、これからの産業医に必要な記事を掲載してモデル研修に協力をした。

愛知県における研修：

62年度：環境測定講演と実演、職業病診断実演、衛生統計とコンピュータ処理

63年度：最近の産業保健の動向(1) 最近の産業保健の動向 (2)

瀬戸地区における研修：

62年度：じん肺資料室見学とじん肺の歴史、陶磁器産業と有機溶剤、工業中毒、粉じん対策と陶磁器工場見学、じん肺教室と健康相談、窯業じん肺、モデル研修経過報告及びアンケート調査、産業医・監督署と事業所との懇談会、産業医事例報告

63年度：アスベストと健康障害、職業病と労働衛生、安全衛生法の問題点、粉じん測定と原料工場見学、じん肺の近況、VDT障害研修、第二回じん肺資料室研修、オフィスの健康障害と工場見学、これからの産業衛生活動の展望

産業衛生一口メモ：

労働衛生の目的、産業医の定義、産業医の活動、ILOの警告、労働災害と職業病の推移、労働衛生の三原則、P. パーシバルと陰囊がん、エビデミオロジー、職業性疾病、産業医と健康診断、健康診断と健康管理、じん肺、有機溶剤中毒1、2、3、労働衛生のしおりより、事務室の作業環境管理、発がん性化学物質と法規制



旭労災病院じん肺資料室

# 報 告

## 我が社の健康づくり 『ヘルスアップヤマハ運動』



那須 孝明 (ヤマハ健康管理センター)

### 1. はじめに

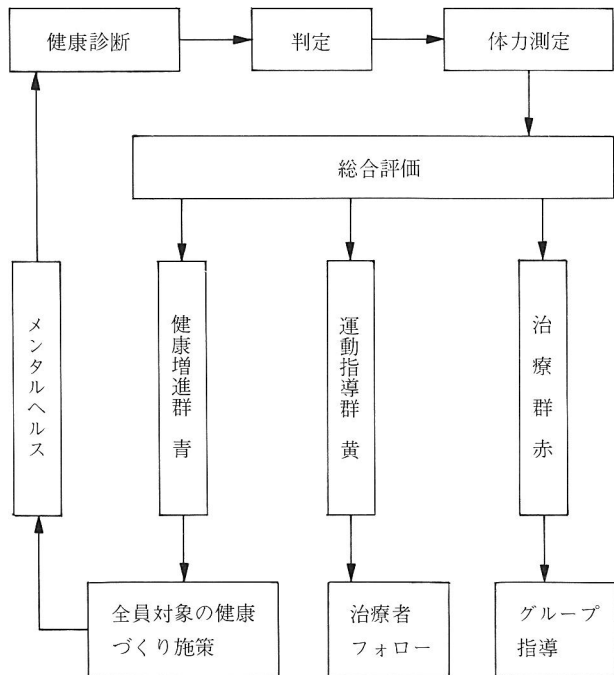
各企業において健康問題は、特に力を入れるようになってきました。これは、定年延長に伴う高齢者対策だけでなく、「半健康者」や「体力不足者」が増加傾向にあり、これら

の原因が生活習慣にあると言われており、昔と比較して、病気の性質が変わってきたことと、その数も増えてきたことです。なかでも大きく変わったのは、昔の〈急性病〉(自覚症状がある)から今日の〈慢性病〉(自覚症状がない)へ変化してきたことです。

このことは、交通革命や、作業の機械化などによる運動不足や食生活の変化による影響が大きな要因となっています。これにより、運動不足や基礎体力の低下、成人病とよばれる疾病の増加など、多くの健康阻害現象が目立ってきています。

このような状況の中、我が社の健康づくりは、昭和54年より各工場ごとに展開され、『ヘルスアップヤマハ運動』という名称で、昭和61年6月より全社的にスタート致しました。

### 2. ヘルスアップヤマハ運動の展開施策



### 3. 健康づくりの特長

○全従業員を対象に、年1～2回、就業時間内に体力測定を行います。

種目……踏台昇降 (全身持久力)、立位体前屈 (柔軟性)、垂直とび (瞬発力)、反復横とび (調整力)、上体おこし (筋持久力)

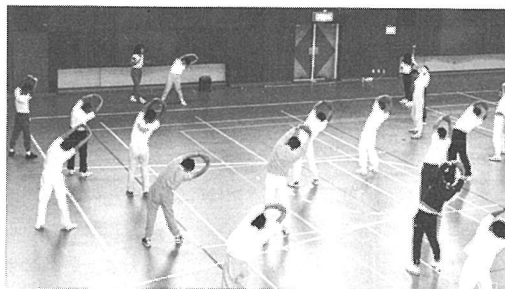
体力測定実施率 87.2%

○健康診断と体力測定の結果により、健康度区分 (青・黄・赤) を行い、その区分に応じた健康指導を行っている。

全員対象の健康づくり(青)…トレーニングルームにて、ヨガ、エアロビクススクールを開講している。

昼休み、就業後のゲーム的運動 (インディアカ) の普及をしている。 etc

ヘルスケアリーダー養成講習会



トレーニングルームにおいて小集団活動や個人利用者に対しトレーナーが運動指導する。

運動指導群 (黄) の指導…要素別にグループ指導を行う。

本年度は、肥満者を対象に、トレーナー及び栄養士による週1回3ヶ月間の運動指導を行っている。

治療群 (赤) ……健康管理情報システムの活用により速やかな対応をする。

○体育大卒の専任トレーナーが5名おり全工場を巡回指導している。

○職場の健康づくりの推進役として、ヘルスケアリーダーの養成を行っている。

○健康診断及び、体力測定の情報コンピューターシステム化し、本人に過去3年分フィードバックしている。

○メンタルヘルスの諸施策として、看護婦に、カウンセラーの資格を取得させ、相談窓口として、一次的対応をする。

### 4. 今後の方向性

『健康は、人間が求める基本的な欲求の一つですが、失って始めてその存在価値を知ることができるもの』と言われます。このことから今後は、より積極的に“健康づくりのために努力できる人”づくりを目指した展開を進めていきます。

体力測定風景



▲ 豊岡工場インディアカ大会 (88.7)

## 話 題



「暴饮暴食なる呪われし悪徳行為により、自然の定めし寿命よりいたずらに死を急ぐ」とは、イタリアのフィレンツェ育ちで『アカメロン』の著者ジョバンニ・ボッカチオ (1313～1375年) の警句である。この短い言葉の中に肥満の生態、つまり因果応報が巧みに表現されている。14世紀、フィレンツェで始まったルネッサンス文化の幕明けは、中世における宗教と封建制度とに長い間抑圧されていた人間解放の目覚めであり、“Quality of life” が謳歌された。そんな風潮の中、人々の社会生活の一端を風刺したボッカチオの言葉はまさしく、現代にも当てはまるものが少なくない。

さて、肥満が病気かと疑問視する向きもあるが、肥満に伴う併発症が問題であると考えられる。糖尿病や心疾患はその代表である。しかし肥満者に病的意識があるかといえば、残念ながら大部分の人が病気とは考えていないのが実態である。従業員 6 万人を超える会社で、肥満度 +30% を超える人を対象としたアンケート調査を行ったところ、僅かに 26.3% の人が肥満を病気と意識しているにすぎなかった。

高度肥満者を対象に、糖尿病、心疾患、高血圧、高脂血症の発症、進展の推移を 5 年間 (1981～1985年) に亘って追跡調査を施行、非肥満者に比べて以下の点で特徴がみられた。①経年的に糖尿病・高

## 肥満は成人病予備軍

堀田 饒 (名古屋大・医・第 3 内科)

脂血症の発症頻度が増、②高血圧、心疾患には特に変化がみられなかった、ことである。また、1983年から高度肥満者が経年的に1988年迄著増しているが、このことが自動車の生産台数の増加と極めてよく一致したことは興味深い。加えて、1981年に比べ1985年には、糖尿病と高脂血症の発症頻度が高かったが、職場に於ける種々のストレス解消の手段として、飲酒・飲食量の増加に一因が考えられた。このように、代謝異常に比べて循環器系には殆ど影響がみられなかったが、代謝異常の長期持続が将来これら循環器系へ悪影響をもたらすことは十分予測されるので、厳重な指導・管理下でこれら代謝異常の是正に努めたいと考えている。

この追跡調査並びに肥満者の管理・指導は現在も継続中であるが、アンケート調査の成績からも分るように、肥満の是正には本人が如何に病的意識を抱き、減量に取り組むようになるかである。つまり、肥満者自身が「肥満を病気」と考え、その是正に努力するような「動機」を見出すのを手助けすることも管理者側の一業務といえるであろう。そして、肥満是正の実をあげるには、①肥満是正の必要性を患者に如何に動機づけるか、②獲得した減量を如何に長期持続させるか、に鍵がある。

### 「大島秀彦先生を惜む」



#### 故大島秀彦教授 略歴

大正12年10月30日 北海道旭川市に出生  
昭和25年 3月 京都大学医学部卒業  
昭和30年 6月 三重県立大学医学部  
助手 (公衆衛生学)

昭和34年 8月 三重県立大学医学部助教授  
昭和47年 6月 三重県立大学産業医学研究所教授  
昭和51年 4月 三重県衛生研究所長  
昭和52年 4月 愛知医科大学教授 (衛生学)  
昭和58年10月 日本産業衛生学会東海地方会会長  
昭和60年 9月 愛知医科大学理事  
昭和62年 6月 第33回東海公衆衛生学会会長  
平成元年 1月24日 死去 享年65歳

#### 故大島秀彦先生を偲ぶ

小林 章雄 (愛知医大・衛生)

故大島秀彦教授は、昭和52年4月、愛知医科大学の第2代衛生学教授として着任され、爾来、主として、除草剤を中心とする農薬の毒性に関する研究をすすめてこられました。これらの研究の成果は、昭和58年度日本産業衛生学会東海地方会の会長講演にて『農薬の毒性』と題して発表されました。先生の御闘病は十年余に及び、この間、幾たびかの御入院を余儀なくされました。しかし、先生は、何事によらず『人を頼む、人に頼む』ことを断然潔しとせず、教室員の論文指導から学会の準備、学生の講義にいたるまで、病を省みず、ご自分の職責を果たそうとされてきました。「講義中、いつ倒れるか心配で、安心して居眠りができません」などと学生を嘆かせたりしました。「先生、今回も間一髪のところだったみたいですねえ」「そうですねえ。どうしてやる。運がええんですかねえ」病室で、こんなやりとりをしているうちに、

いつの間にか先生はまた退院され、戦列復帰しておられるのが常でしたが、今冬、先生はついに、ついに力尽き、帰らぬ人となってしまわれました。容易ならざる学究の道を、寡黙に、ひとすじに歩まれた先生。不器用とさえ思える頑固な一途さを貫きながら、あふるばかりの温情をそそいでくださった先生。そのお姿を、心に深く刻むとともに、先生の胸の内に宿っていた、あの、輝くばかりの剛毅の魂をこそ、私どもは終生忘れないうでありましょう。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

#### 大島秀彦先生を追悼して

吉田 克己 (三重大名誉教授・京都工場保健会)

かねがね大島君が体の調子が思わしくなく、入院療養に努められておられることを心配していたが、その赴報に接して本当に残念なことになったとの思いで一ぱいである。

同君と私は同じ京大の公衆衛生の同窓の仲で、私が昭和30年に当時の三重県大医学部に赴任して来た時に少し遅れて来てくれて、長く助教授として勤務して貰い、その後同君が愛知医大教授に赴任してからも、同君の奥さんと私の家内とが大変仲がよかったこともあって、夫婦ともどものつき合いだけだっただけに残念でならない思いである。

三重大学の時は、当時大問題であった四日市公害の問題で私の研究を助けてくれると共に、労働衛生の部面でも、当初は二硫化炭素の代謝について、私が京大時代に見出したヨードアザイド反応についての知見の拡大に努めてくれ、これは後のACGIHの生物学的モニタリングへのTTCAの採用にもつながった。又、後には農薬の生体影響についての研究に努め、彼の主要な仕事の1つとなった。

彼は大変おとなしい、寡黙な人間であったので、あまり目立つことはなく、コツコツとやるタイプだったが、後半生では体を悪くしてしまい、彼自身くやく思っていたに違いないと思うと、大変心傷む思いで一ぱいである。

## 学会・研究会活動

### 第 2 回職業性肺疾患研究会

第 2 回職業性肺疾患研究会は、平成元年 3 月 4 日午後 2 時より名古屋大学医学部会議室において開催された。司会者の挨拶の後、旭労災病院副院長吉野貞尚先生によって「臨床の場からみたじん肺の近況」というテーマで講演がなされた。当日はあいにくの雨降りであったにもかかわらず、吉野先生の長年の臨床経験に基づくお話であり、学会員のみならず吉野先生と長年仕事を共にしてきた旭労災病院の看護婦らも含めて多数の出席があった。始めの 1 時間は吉野先生の講演で、……①旭労災病院開院時から 28 年 4 ヶ月勤務して、じん肺患者の治療にあたったこと。②じん肺患者は高齢化しており（平均年齢—通院患者 65.1 才、入院患者 70.8 才）、今後の見通しとしてじん肺患者の死亡する割合が増加傾向にあること。③最近では殆どの患者が退職してからじん肺が増悪し、随時申請によって労災認定されているケースが多いこと（新規発生患者の平均年齢 62 才）。④旭労災病院は、窯業じん肺の患者が多いこと。⑤じん肺患者の死亡年齢も高齢化し（昭和 63 年の平均—75.5 才、日本人の平均寿命に近づいていること。⑥死亡の原因としては肺癌によるものが増えてきていること。⑦最近でもじん肺患者の治療にあたっては、肺結核症が問題になること。……などが話された。残りの 1 時間は、出席者の間で活発なディスカッションがなされ、今後じん肺症を考えるにあたり、大いに参考となる有意義な研究会であった。

五藤 雅博（旭労災病院）

稲垣幸司、小山 明、児玉欣也、山田春生、西脇 洋、瀧田資也  
加藤兼房、佐藤孝一、山口花往里、船越宏洸、渡邊美寿津  
吉田早苗〔岐阜〕山田武次、吉田英世、藤田節也、永田知里  
Mirbod Seyed Mohammad〔静岡〕菊池一好、木村東二  
田辺雅啓、小澤亨司、岡田いそ子、北村絢子

転入会員 1 名 稲葉 宏（兵庫→静岡）

転出会員 2 名 長岡 芳（愛知→大阪） 橋本郁夫（愛知→岐阜）

退会会員 10 名

〔愛知〕田辺栄一、清水智子、神谷文子、藍田俊郎、古田達次  
有滝真由美、加藤一郎、飯島直人、加藤雅男〔岐阜〕岡本祥成  
（第 14 号 近藤順一郎（愛知）は静岡の誤りでした。お詫びとともに訂正致します。—事務局）

地方会会員数（1 年 3 月 11 日現在）

482 名（愛知 334 名、静岡 63 名、三重 34 名、岐阜 51 名）

第 5 回理事会 元年 1 月 24 日（火）大同特殊鋼本社 出席者 26 名

本部及び事務局からの連絡事項（島、立川）

昭和 63 年度日本産業衛生学会東海地方学会（島）

平成元年度東海地方会研修会（清水）

第 6 回理事会 元年 3 月 28 日（火）大同特殊鋼本社 出席者 23 名

本部及び事務局からの連絡事項（島）

第 5 回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理  
担当者のための研修会（岩井）

第 2 回職業性肺疾患研究会（久永）

昭和 63 年度事業報告（案）、昭和 63 年度会計中間報告、

平成元年度事業計画（案）、平成元年度予算作成方針

平成元年度東海地方会学会について（橋本）

## これからの諸行事予定

○平成元年度日本産業衛生学会東海地方会総会／研修会

平成元年 6 月 9 日（金）クーポール会館（静岡市）

運営委員長 清水善男（三菱電機静岡）

講演 健康づくりの基礎 小山内 博（健康づくり研究会）

これからの聴覚管理

—騒音職場における聴覚管理の現況と展望—

調所 廣之（関東労災病院 耳鼻科）

アルツハイマー病の分子生物学的研究

伊東 平隆（旭化成 生科学研究所）

○第 35 回東海公衆衛生学会

平成元年 6 月 23 日（金）名古屋市中小企業振興会館

学会長 大野 良之（名市大・医・公衛）

○第 29 回全国産業健康管理研究協議会（全産研）

期日 平成元年 7 月 1 日（土）

会場 全共連ビル 東京都千代田区平河町 2-7-9

主題 やわらかい健康管理 一画一性からの脱皮をめざして—

パネリストとして武ノ上庸先生（東亜合成）がでられます。

## 会員の消息

（63 年 12 月 16 日～1 年 3 月 11 日）

新入会員 28 名

〔愛知〕早川直義、伊藤輝男、今泉佐智子、伊藤正俊、植月良太郎

## 編集後記

去る 1 月 24 日、大島秀彦教授が亡くなりました。温和な先生の人柄が偲ばれ誠に残念です。先生のご冥福を心からお祈り致します。

青森の産業衛生学会、秋田の衛生学会と春の長旅の終る頃、皆様のお手許に地方会ニュースをお届けできると思います。第 15 号は巻頭を青山光子教授に飾っていただき、特集には「第 5 回産業医・産業保健婦・産業看護婦および衛生管理担当者のための研修会」と「産業医学研究の今日的課題と展望」の 2 つを組みました。後者はシリーズ物として今後各大学を巡ります。

また本号では 3 月定年を迎えられた吉川先生、吉野先生をはじめ会員外の先生方からも玉稿をいただき多彩な内容のニュースをお送りすることができました。（滝川 寛）

次回発行 平成元年 9 月 1 日

編集責任者 岩井 淳（三菱名古屋病院）

編集委員（五十音順）

柏木時彦（柏木事務所） 加藤保夫（岐阜県産業保健センター）

五藤雅博（旭労災病院） 後藤 猛（ヤマハ健康管理センター）

小森義隆（大同病院） 滝川 寛（三重大学）

竹内康浩（名古屋大学） 久永直見（名古屋大学）

森川利彦（三菱電機名古屋）

吉田 勉（藤田学園保健衛生大学）